新興国企業の優位性構築と国際化

－中国企業の対日 M&A に関する実証分析－

龔　園園

本研究は、先進国企業に対する M&A を通じて、必ずしも優位性を持たない新興国企業がいかに優位性を構築し、国際化を進めていくのかといった問いに対して、そのプロセスを解明することを目的とする。中国企業による対日直接投資に焦点を当て、定量的および定性的分析を行った結果、新興国企業はクロスボーダーM&A を通じて本国におけるキャッチアップからグローバル展開へ移行していくプロセスを明らかにした。

具体的にはまず、内的国際化の経験によって本国における優位性を作りあげ、国際化の土台を固めていく。次にクロスボーダーM&A で得られた資源を本国で活用し、不足している知識やノウハウを補完することでキャッチアップを実現する。さらに、新興国企業は自社の既存の経営資源を、海外拠点で蓄積された知識やノウハウと結合し、優位性がネットワーク状をなしてグローバル展開を進めていく。

本研究の構成は、以下のとおりである。まず第 1 章では、本研究の問題の所在と目的について検討し、研究対象と方法を提示する。第 2 章では、分析を進めるうえで前提となる新興国企業の対外直接投資と国際化に関する既存研究を整理する。さらに、本研究の対象とした新興国企業による対外クロスボーダーM&A に関わる先行研究をレビューし、本研究の位置づけを明確にしておく。

続いて第 3 章では、企業の戦略的意図と国の政策の変化以外の、新興国企業によるクロスボーダーM&A を促進する要因を理解するために、2002 年から 2011 年までの中国企業の対日直接投資を対象に、進出モードの影響要因について定量的分析を行う。そこで、投資の受入国と新興国企業の特質の角度から、中国企業の対日 M&A の論理を検討する。

第 4 章では、中国の繊維大手である山東如意科技がレナウンに資本参加する事例で資源活用のプロセスについて考察し、資本参加によって投資先企業の筆頭株主となった場合、新興国企業は M&A 後にいかに買い取った資源を活かし、自社の優位性構築につなげるのかについて検討する。さらに、その資源活用を妨げる要因についても議論する。

第 5 章では、M&A 後の資源活用プロセスを短期と長期に分けてみると、その資源活用の中身と活用の仕方がどのように変化するかについて、中国の大手総合電機メーカーの上海電気による池貝とアキヤマ印刷機の買収を事例に分析する。それを踏まえて、新興国企業自身の知識吸収能力と投資先企業の有する優位性の限界性が、資源活用の効果に対する影響を検討する。

第 6 章は、M&A に先立って、すでに外国企業との業務提携によって本国市場における強固な優位性を構築できた場合は、新興国企業が M&A 後にどのように資源を活用するかについて、ハイアールによる三洋電機白物家電事業の買収を事例に分析する。さらに、その資源活用の仕方は、新興国企業のグローバル展開にどのような役割を果たしているのかについて議論する。

第 7 章では、以上の議論を踏まえ、新興国企業のクロスボーダーM&A を従来の多国籍企業論では論理的に説明しきれない点について提示する。そのうえで、優位性構築を中心とした国際化プロセスの試論を展開することで、既存の理論的枠組みの拡張を試みる。

最後に、第 8 章では以上の分析で得られた議論をまとめたうえで、本研究の理論的、実務的インプリケーションと今後の課題について検討する。